

## 枯れたヒマワリより ー外交官の妻、そして自分らしく

栗山 昌子(IA)

ICU に入学した日、校門からチャペルまでの桜並木の美しかったこと、そしてクラスメートもみんな若くて希望に燃えていたこと、キャンパスの空気の匂いまで、懐かしく思い出しています。

### ☆ 出会いこそ財産

**高** 校2年の時に、サンフランシスコ講和条約発効という戦後日本にとっての大きな節目を迎えました。日本もこれからは国際社会の中で平和を求めつつ外国の人たちと対等に付き合っていけるのだということ、そのためには我々若い世代が外に飛び出して新しい道を開いていくのだ、という気概を持ったものです。

そして選んだ大学が ICU でした。

今、自分の歩んだ人生を少し振り返るとき、その当時よりもっと「よい選択だった」と感じています。大学には最初から今に至るまで実に多くの「出会い」がありました。

この「出会い」が私の財産となっていたのです。

**当** 時から私は色々なことに興味を持つ人間でした。男の子相手に「女だてら」に相撲をとるだけでなく、何でも見てやろう、何でもやってみたい、という性格でした。幅広く学べる授業の一つ一つに大変魅せられたものです。

チャペルの時間、コンボケーションなど

大変に有意義なときでした。色々な先生方や周りの人たちからの話などから、それまで全く興味の無かったキリスト教との出会いは大変に大きな出来事でした。そしてブルナー先生から洗礼を受けることが出来たのです。

### ☆ 秋田先生

4年間、アドバイザーとしての秋田先生からは数多くのことを、とりわけ一生懸命に生きることを学びました。卒論も指導して頂いたのですが、方針を先生と討論していくなかで、既成の形にとらわれない自由な発想を大事にしよう、ということになりました。自由な発想が許される根底には、真摯な基本的な学問を積んでこそ、ということも徹底的に教えて頂いたと思います。沢山の本を紹介して頂き、机の上に積み上げて「よし、これから始めるぞ」と大決心で土俵に上がるのですが、不肖の弟子は本の中の目についた良いところ取りをして、その上に自分の考えを発展させていったように思います。

**本** 当に先生の教えを学ぶということは、ご自分が一生懸命に学んでおられた先生の後ろ姿に注目していかなければ出来なかったことと思います。とことん納得のいくまで机に向かっておられ、考えを進めて行かれる姿をこそもっと学ぶべきでした。それなのに、要領よく先生と付

き合ってしまった自分にとっても反省することが多くあります。

今でも先生は、次から次へと勉強された成果を本にして世の人に示されています。勉強会も続けておられるそうです。つくづく「学ぶことには終わりが無い」のだと教えられます。かつて先生の下で一緒に勉強した仲間と集まるとき、半分以上は学者です。そのことを思うと、学生時代に取り逃がしてしまった大きな損失を残念に思うこともあります。

でも、それはそれ。自由な考え方を一緒に発展させてくださった先生のおかげで、私は外にどんどん飛び出して行き、私らしく自由に生きてこられたのです。心から感謝しています。

#### ☆「自分らしさを大切に」

後 外交官である夫(編集部注 = 尚一氏は外務次官、駐米大使など歴任)と結婚したときにも、秋田先生はお祝いのスピーチをしてくださいました。何にでも興味を持つこの『お転婆娘』がこれからは世界の人々とのつながりの渦中で活動するに際して、「自分らしさを大切に、このユニークな大学で学んだ幅広い教養を活かして世界平和を支えるように」と励まして頂きました。「男だったら秀才といってあげるのだが、女だからその言葉は遠慮しておきましょう」という新鮮な響きの言葉が今も耳に残っています。(先日、お会いしたときにその話をしたら「そんなこと言ったかな」と困っておられました)。

夫も初めてお会いした先生にとっても心惹かれ、すっかりファンになってしまいました。

そんなことから娘を ICU に学ばせ、彼自身も退官後には ICU で国際関係論を教えるようになりました。ICUの学生の特性は「自分の考えを持っていること、自由に発想が出来ることだ」と言っています。

ただ、夫はときどき私の自由奔放な発想に戸惑うようです。「次から次へと湯水のように新しい考えが出てくる。それは素晴らしいのだけれど、一度決めたあとでも後知恵が出てくるとすぐに反省してしまう。決めたのだから、そのままやり遂げたら？」と、よく言われます。私は「君子は豹変することも大事なの」と理屈をこねたりしています。

#### ☆水鳥のように

外

外交官の妻としてニューヨークに1964～68年、ワシントンに1974～77年、その後は大使として赴任した夫とともに1992年～95年をワシントンで過ごしました。その間、マレーシア大使を務めた1986～87年にはクアラルンプールで暮しています。一昔前は「外交官夫人」といえば華やかな社交の場を思い描いた人が多かったことでしょう。そういう時代があったのは確かですが、世の中の移り変わりと共に担うべき役割は大きく変わりました。とはいえ、いつの世にも「大使夫人」には優雅な姿も求められているのだと思います。

よく私は水鳥に喩えて話します。湖に泳ぐ姿は美しいけれど、水面下では足をバタバタと動かしていなければならず、その姿を保つことは大変なのです。優雅であることは、贅沢なものを身につけることではなく、落ち着いて人との付き合いや、自分のやるべき仕事をこなせるということだと思っています。

見えないところで、どれだけ働いたり準備したりしなければならぬことでしょうか。そして、羽を切られた水鳥であってはならず、常に飛び立つ準備をし、大空にその美しい舞姿を披露することも必要なのです。どれだけ出来たか解りませんが、これが私の理想の姿でした。

私が大事に考えてきたことは、夫の仕事の、また、任国の人たちとの間の良き理解者であり、潤滑油となる、ということです。

### ☆ *The Ugly Americans*

婚約時代から、夫は秋田先生よろしく次々とアサイメントブックを持ってきました。その中に“*The Ugly Americans*”というのがあり、ケネディ大統領の推進したピースコア（平和部隊）の功罪を語ったものでした。英語の勉強もかねてでしたが、私はそこから世界には色々な国があって、特に当時の発展途上国にはそれぞれに昔から大事にしてきた生活習慣や文化がある、それらを理解して付き合っこそ、次のステップである真の理解が生まれるのだ、ということ学びました。

マレーシア赴任は実に面白い体験でした。それまであまり知らなかった国でもあり、赴任前には毎日が勉強の日々でした。野田英二郎研修所長（雅子さんのご主人）のご協力も得て、まずマレー語の勉強、それと同時に風俗習慣を学びました。このことが任地でどんなに役に立ったか、今でも野田大使に感謝しています。

その国の人たちや社会に受け入れられるには、こちらも相手の風習や文化、その考え方を理解して、受け入れなければな

りません。エチケットなど西洋流のものではなく、その国独特の、そして多くは宗教に根ざしています。たとえ少しでも学んでいたのも、お互いの交流をスムーズにするのに大いに役立ちました。

### ☆ マレー語でスピーチ

着任後、マレーシアの方たちとの最初の大きな会合で、急にご挨拶をする役回りになったことがあります。習いたてのマレー語を全部並べ立てて話をして、皆さんにとっても楽しんでもらいました。たちまち有名人にもなり、親しみを持ってもらえたのはとても良い思い出です。

わずか1年半でしたが、見るもの聞くものすべて興味深く、日本の皆さんにもこの国の良さをもっと知って欲しいと思い、帰国後、本を書きました。『マレーシアの魅力一人の心の温かい国』（1989年、サイマル出版会）ですが、今はアマゾンでしか手に入らなくなっていました。両国友好に尽くしたとして、国王陛下から勲章を頂き、大感激をいたしました。

子育てに追われて若いときを過ごしたアメリカでも、ユニークな体験をする機会に恵まれました。豪州、デンマークの大使館の夫人たちと3人で、自国の話をするキャラバン旅行に行ったのです。アイオワの新聞記者に連れられ、ワシントンから車で丸2日をかけてミズーリー州のオザックマウンテンの中にある静かな街に行きました。

毎晩違った家族と過ごし、集まる人たちと日本のことを話し合いました。驚いたことに、アメリカは広いということにもなるのでしようが、その山の中の静かな街では、日本と

戦争をしたとことを知っていた人が少なかったのです。そんな中で日本のことを話し、戦争のことも話しながら、アメリカ人のホスピタリティーを楽しんだ1週間でした。

### ☆大きな支え ICU

私が ICU の卒業生ということで親しみを懐かれることもたびたびありました。「教会で寄付をした大学だから知っている」というのです。

ICUは、日米関係を語るときに、大きな支えとなる言葉でもあります。アメリカの善良なクリスチャンが、原爆投下の謝罪としてこれからの日本に何をしたら良いだろうかと考え、戦後の新しい日本を背負っていく子供たちの教育のために献金してくれたお金で作られた大学なのです。「私はそこで学びました」と感謝をこめていうと「礼拝のたびに日本に対する罪の意識と共にICUの学生たちのことを思って献金をした」といってくれます。初老のアメリカ人女性が「当時のことを思い出した」と日本大使公邸に私を訪ねてくれたこともありました。

**最** 近のアメリカ人は日本のことをよく知るようになりました。海と  
いえば大西洋のことで、太平洋は戦争の関連でしか知らない人が多かったのに、今や食べ物に至るまで大ブーム。日本にいた人や親日派の人たちは、日本をかなり知っていてもっと理解しようとするけれども、そうではない人もたくさんいます。ワシントンでは、特に議会関係の人は、地方から出て来るわけですから日本のことをあまり知りません。学び理解する機会に恵まれない人たちも多かったのです。

### ☆ミミのサロンと奨学金

**そ** こで私は、大使館の協力を得て「ミミのサロン」を開くことにしました(ミミは私のニックネーム)。1月半に1度くらいの割合だったでしょうか。生け花、陶芸、文学、日本刺繍など、たまたまアメリカを訪ねてこられた先生方にお話や実演をお願いしました。その間に私が経験したアメリカの印象を面白おかしく聞いてもらっていました。

最初は「外交の基本は人と人とのつながりから」と、お互いが知り合うことの一助になればと始めたことです。メンバーは政府高官や議員夫人が多かったのですが、だんだん働く女性や文化関係の人たちにも広がり、とても楽しい会に発展しました。私が帰国するとき、皆さんが残念がって募金による「ミミの奨学金」を作ってくれました。「貴女が大切にしていたアメリカ人の、特に若者の日本への理解を育む」ことをめざす、という有り難い話です。今でもメリーランド大学の大学院生が毎年1人ずつ日本研究のため1年間日本に留学する費用になっています。

### ☆夫婦で地方巡業

**夫** は「大使の重要な任務は人との交流にある」と言い、よく地方巡業に出かけました。私も社交行事などもあるので一緒に行きます。「2人で同じことをしてはもったいない」ということで、私は主に子供たちとの対話に時間を使いました。たいていは小学校や中学などですが、ときには幼稚園を訪問したり、女子大でスピーチをしたりしました。日本を知ってほしい一心のささやかな努力です。将来、子供たちが日本に興味を持って、好きにな

ってくれることを心から願いました。

**地** 方に行くと、多くの人たちに出会います。そして数多くのことを学びました。特に、日系の人たちの話には心打たれるものがありました。色々な場所で働くボランティアの方々の、ものの考え方や在り方には、アメリカ人らしい発想もあって、私の目には実に新鮮に映ります。「身近にある事柄で自分の出来ることをやる」ということです。それをすることによって得るのは「友人」なのです。

#### ☆木を揺するボランティア

例えば、ネブラスカの大きなドームで囲われた熱帯雨林の植物園を見学した時のことです。引退して時間が出来たお年寄りが200名ほど登録していて、掃除や水やりを交代でグループ毎にするのですが、ある人たちが「私たちは木を揺する役目です」といいました。「ドームの中では木が成長するのに必要な自然の風が来ないから」だそうです。感心しました。「求められることは何か」と考えながら、社会に奉仕しようとしている人たちに学ぶことが多くあったのです。

**私** も今年70歳になり、家庭裁判所の調停委員を退職しました。アジア婦人友好会の理事長も8月で退きます。しかし「新しい街づくりを考える会」の理事や「エイズ予防財団」の副会長、国立感染症研究所の倫理委員など、まだまだ奉仕することがたくさん残っています。専門に

勉強した分野でない事柄が多いのですが、むしろ素人の立場からの自由な意見を求められているのだと思います。この歳でも、人のために、いくらかお役に立てる私であることは有り難く、これからも頑張っていくます。学生気分をまだ卒業できずに今でも色々なことに興味を持ち続けている証でもあります。

思えば、あまり振り返ることもせず突っ走ってきた年月でした。多くの良い人たちに巡り会い、そして助けられ、自由に活かせてもらえたことは幸せだったと思います。

**ア** メリカでの最後の公式訪問地はノースダコタでした。サンフラワーオイルの生産地として有名なところでした。晩秋の広大なヒマワリ畑には写真で見るとような日に向かって咲く美しい花はなく、芯の部分だけが残って、真っ黒に枯れて地面に向けてうつむいています。寂しげな光景でした。この枯れた実の部分から油が搾られるのです。美しい花は華やかで人を喜ばせるのは当たり前ですが、ヒマワリが本当に人間の役に立つのはそれから後なのです。

私にも若き日々がありました。けれども、年老いても「もっとしてやろう」「もって見てやろう」という意気込みを忘れてたくありません。これからこそ人の役に立つように生きたい、と思います。

枯れた黒いヒマワリ畑を眺めながら心を強くしたことでした。